

つながれを、めしあがれ。

世代を超えて、地域を超えて、友と、先輩と、後輩と、現役と、先生と、つながれ。



第37回 静岡県立浜松南高等学校同窓会懇親会

 波濤に集う

2003.1.11 sat.

主催 / 平成14年度 波濤に集う実行委員会

BRIDAL
ブライダル・ウェディング・ブライダル・アドバイザー

HOTELMEN
ホテル・フロント・ホール・コンシェルジュ

大原で 夢をつかむ

OPERATOR
オペレーター

FIREMEN
消防士

ACCOUNT
会計士

GOVERNMENT
国家公務員・地方公務員

CONDUCTOR
運転士

MEDICAL OFFICE WORK
病院・診療科

TRAVEL AGENT
旅行代理店

O-HARA 2003
学園総合 4771-727
053-455-4419
〒432-8023 静岡県浜松市東区江2-47-36

学校法人 大原簿記専門学校浜松校
学校法人 大原法律公務員専門学校浜松校
学校法人 国際トラベル・ホテル専門学校浜松校



校旗

同窓会旗

楽しさいっぱい
夢いっぱい

kimonoサロン
(株)ニッセン優美苑へ

明るく楽しい仲間と着物を勉強しながら気軽に働いてみませんか?

きもの 優美苑 浜松店
ニッセン

053-450-8251 浜松市田町230-17
ウォッチマンビル4F

パートさん
随時募集!!

時給1,000円+交通費
1日3~4時間(月9日程度~)
40~65才位

校歌

作詞 静岡県立浜松南高等学校
作曲 渡瀬祥光

- 一、 東海¹の風がはばたく
あさあけに松はのびたち
学²ぶ誓³いも強く いま
あらたな日本の光を呼ぼう
われら
ここに集う 浜松南高校
- 二、 赤石の雲ゆくところ
のぞみわき汗につちかう
かおるみどりの学園⁴に いま
最善⁵つくす誇りをもとう
われら
ここに勢⁶う 浜松南高校
- 三、 大洋の潮のいぶきに
こたえては日々にいそしむ
願⁷いあかるく友と いま
歴史をひらく使命に立とう
われら
ここに歌う 浜松南高校

本日のプログラム 浜松と東京を結ぶネット同窓会

皆様になつなごり作りの演出と、楽しめる企画でお迎えします。

14:30	受付開始
14:40	入場(ウェルカムドリンクとJAZZでお出迎え)
15:00	Opening宣言 ご挨拶・祝辞 前同窓会長への感謝状贈呈 校歌斉唱 乾杯
15:15	歓談(心置きなくお話しください) プロの選ぶ全国の銘酒15銘柄&世界のワイン10銘柄の試飲
16:35	太鼓演奏
16:50	ゲーム大会
17:10	平成14年度同窓会役員紹介
17:15	同窓会放り線
17:28	閉会宣言
17:30	解散



8期実行委員長

菅沼泰夫

つながれを、めしあがれ。

私たち8期在学当時は新設校的なイメージが強かった浜松南高校も今や40周年を迎え、同窓会会員も15,000人を超える規模になり、これからは伝統校へと年を重ねていくことになろうかと思えます。

しかしながら、懇親会への出席者も本来、徐々に増えていかななくてはならないところが、既に顔打ちのような感じを受けます。

私たちは2年前より活動を開始して「同窓会は何の為にあるのか」「懇親会の目的は何だろうか」と根本的なところから会話をしてきました。そして何を後輩に引き継いでいけばよいのだろうかと考え、結果として「人と人のつながり」ではないかと考えました。「同窓生」という気安さを生かし、仕事やプライベートで生かせるような会員相互の人間関係を築くことが必要なのではないかと考えました。

懐かしい顔との出会いだけでなく、新たな顔との出会いから新たな何かが始まるような、そんな場となれば、楽しいのではないのでしょうか。そして一人で参加しても楽しめ、期を隔てた人の輪が広がるような談笑の場を創造したいと考えました。8期企画の懇親会はこんな思いを形にしてみました。どこまで具現化できたかは分かりませんが、結果は本日お集まりの皆様がお一人でも新たな出会いをして頂けたなら、成功だったと言えるのではないかと思います。

私事ですが、委員長をさせて頂いたお陰で多くの同窓生の皆様方と出会うことができたのは、大きな財産だったと思っております。また皆様とのつながりが私を助けて下さったと実感しております。

南高には自由な発想とそれを受け入れる土壌があります。南高独自の同窓会としての組織運営、懇親会の運営をこれからみんなで考え進めて行ってはどうでしょうか。今回、文化祭への参加や日程変更、関東支部との同時開催、講演会を行わないなど色々とチャレンジしましたが、これらの結果も今後の糧になれば幸いです。結びにあたり、ご臨席頂きましたご来賓の皆様、ご出席頂きました同窓生の皆様、広告ご提供頂きました皆様、ご在籍の先生、職員の皆様に御礼申し上げますとともにご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

テーブルレイアウト





静岡県立浜松南高等学校同窓会
会長 沢根孝佳

ごあいさつ

新年あけましておめでとうございます。

浜松南高等学校同窓会の会員の皆様には、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。日頃は、同窓会にご支援、ご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

私は昨年6月の総会で、河邊前会長の後を引き継ぎ、会長を務めさせていただくことになりました。会員の皆様が築き上げてきた南高同窓会をさらに発展させ、会員相互の親睦と交流がより盛んになることを願っております。

そして、第37回「波濤に集う」が、ご臨席をいただいた恩師の皆様方を囲み、多くの同窓会会員の皆様のご参加をいただき開催できましたことに感謝申し上げます。同窓会最大の交流の場である「波濤に集う」が、同窓生・恩師・学校・在校生・地域社会とつながり、皆様のお役に立てば幸いです。

社会を取り巻く環境は、成熟・選別・変革という今の時代のキーワードのように相変わらず厳しいものがありますが、目標をもって明るく元気に前向きに進んでいきたいと思えます。

母校南高校の様子も新しい時代の変化とともに少しずつ変わってきております。在校生の活躍は、近年目を見はるものがあります。新しい試みとして昨年より同窓生が中心となり教壇に立ち、在校生に職業観や人生観を話す進路講座を学校からの依頼を受け実施しました。生徒の皆さんのみならず、お話をいただいた同窓生の皆様からも大変好評でした。今年もいろいろな業界で活躍されている同窓生のご協力をいただき、母校に足をはこんでいただければと思います。

本校の同窓生は昨年3月の卒業式で15,702名が社会に巣立っております。ここ浜松・県西部地域はもとより国内や海外のあらゆる分野で南高の校訓「最善を尽くそう」の精神を発揮し活躍されております。皆様のお力をお借りし、同窓会としても母校の発展のために側面から支援をしていきたいと考えます。

今年度の「波濤に集う」は、8期生が幹事として企画・運営し新しい試みとして、浜松と関東支部会場をインターネットでつなぎ同時開催し盛り上げていただきます。

今回の開催にあたり、広告にご協力をいただきました皆様、また幹事学年の8期生の皆様や関東支部の役員各位に心よりお礼申し上げます。来年も一人でも多くの同窓生が一堂に会し、楽しく元気な「波濤に集う」が開催できますよう願っております。

会員の皆様と母校の浜松南高校のご活躍とご発展をお祈りし、同窓会に対しましても引き続きご指導やご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



静岡県立浜松南高等学校
校長 杉本一美

ごあいさつ

平成14年度第37回「波濤に集う」が「つながれを、めしあがれ。」と題して、盛大に開催されますことを心よりお祝い申し上げます。おめでとうございます。

過日、役員の方々から今までとは違った新たな試みを計画し、より一層同窓会員の親睦を深めていきたい、とのお話があり素晴らしいことだと感服いたしました。

新たなことへの取り組みには継続することとは別の大きな力と決断力が不可欠であり、これを支える周囲の環境も大切になってきます。

また学校のことにおきましても、学校完全週五日制、小中学校の学習量の削減、センター試験七科目、高校入学者選抜の改革等新たな方策に取り組むことを急激に、しかも大量に時宜にかなうよう取り進めなければ生徒への働きかけが後手になってしまう心配があります。

比較的悠長な静岡県の状況が全国レベルと感じていると浦島太郎になってしまう心配もあります。これからの社会は、外へ向けての情報発信や情報開示が当然のこととなり、学校であっても選ばれる存在、その中で働く教職員であっても同じように評価されていくこととなるのではないのでしょうか。

公務員制度の改革も同様で、議論が進めばサービスの提供をいかに行うかの競争になっていくのではないのでしょうか。

過日、ノーベル賞を受賞されたお二人の教育に対するご意見の中に、悪い点を指摘することの弊害が示されていて、これは個人が周囲から保護されることではなく、発展的に評価されることにより開発開拓をする大切さや、今までにない新たなことに取り組む勇気と力が大切であることを示していると考えました。

「波濤に集う」が時を迫るごとに衣替えをしていき、同窓の集いがますます強いよりどころとなっていくことを思い、南高も理数科を開設し西部地区を代表する進学校となるべく変革を進め、より一層地域の期待に応えていきたいと決意を新たにしています。

同窓会員諸氏におかれましても絶え間ないご支援とご協力をお願い申し上げます。

空から見た南高のあゆみ



開校当時の全景。グラウンドの4分の3はまだ工事で使用できなかった(昭和38年9月)



前年に待望のプールが完成(昭和47年10月)



第2期工事竣工。南館・校門も完成した(昭和39年4月)



現在の南高校

HAMAMATSU MINAMI HIGH SCHOOL

浜松南高校と地理歴史部と私



後藤 澄夫

私は1971年から81年、年齢でいえば34から44歳までの10年間浜松南高に社会科の教師として勤務した。5階の展望台に上がってみれば、東にはできたばかりの職業訓練校があり、北には木々に囲まれた家々の続く米津の集落が広がり、南には四季折々の農作物が耕作される田畑が遠州藩の防風林まで伸び、緑豊かな田園風景に囲まれていた。プールは確かこの年にできた。神輿の本土復帰が決定し、新潟水俣病裁判の判決が下り、山陽新幹線の試運転が行われたのもこの年である。

普通科5、商業科4のクラス編成で、普通科に女子は20名はいなかった。いきなり3年商業科の担任を命ぜられたが、商業科は全員女子で、前任校が男子校であったこともあり、大変戸惑いを感じた。警備と阿蘇の「青年の家」を利用した野外教室と呼ばれた修学旅行と、米津浜でクラスごとに趣向をこらした造形をする「砂の芸術」が他校にないユニークな行事であった。

クラブは地理歴史部の顧問として、今は亡き倉見武三先生の手伝いをするのであった。このクラブは文化部としては恵まれていて、社会科教員の教材室を占領して溜まり場としていた。この部室で、部員同士上級生、下級生が隔たりなく接する機会が多かったことは、担当教師としてクラブの

運営に都合がよかったばかりでなく、このクラブのO.B.-O.G.会が以後長く続いたのも、部員相互の人間関係のつながりに大きな意味を持ったからではなかろうか。

どういふ事情であったか、顧問が山田藤雄先生と私となった。該博な知識を持ち、教育に対する情熱の塊のような山田先生は、学校運営の方に忙しかつたこともあって、クラブの運営は私に任された。何の知恵もない私は、当時整備され話題になっていた東海自然歩道を歩くことにした。年度の初めにコースを決め、クラブ活動の時間に地域の地理や歴史を調べ、乗り物や宿の計画を作った。その調査、研究をもとにして、夏休みに2泊3日の研修旅行に出かけた。箱根の旧街道から京都の西方まで、時には険しい山道を登り、桶腰の走る鬱蒼と茂る杉木立ちの中を雨に濡れながら恐る恐る、虫食いのように所々ではあったが東海自然歩道を歩いた。その後、京都市内の路面電車が廃止になると聞き、お別れ乗車に行ったり、奈良から飛鳥

を回り、山の辺の道から長谷寺、室生寺まで足を延

ばした年もあった。学生の懐であるから、安上がりで中身のある研修旅行をめざし、お寺やキャンプ場や民宿、無い時には安い宿に泊まり、普通列車が原則であった。忘れ者の私はすべて生徒諸君に任せきりで、旅行の時の引率一むしろ連れて行ってもらったという方が正しいのだが一の役割だけをした。

「文化展」—文化祭を当時こう呼んだが一で研修旅行の成果を写真や地図などで発表し、その年のクラブ活動の成果を締めくくったのだが、部長をはじめ中心になった生徒諸君には大変な努力が求められた。部員の数が減り、クラブの存続が危ぶまれる年があった。その時、よく頑張ってくれたのが、現在SBS静岡放送のアナウンサーとして活躍しておいでな鈴木通代さんである。彼女の努力がなければクラブも研修旅行も存続できなかったのではないかと、懐かしく振り返る今もそう思っている。お陰でその後、他校に転動した後もO.B.-O.G.会に何回か招待していただいた。

誌面末尾に掲載した「中田新聞」の記事からもお察しいただける



ように、15年ほど前から夏冬の休暇を利用して、17回、20数か国を歩いた。大別すればヨーロッパ、中国と東南アジア、アメリカと中南米、中東と北アフリカの国々である。3回旅した国もあるが、それらの地域の一部の国々である。友人、知人に「どこの国が一番よかったか」とよく尋ねられるが、ロダン、高村光太郎の友人としても知られる彫刻家高田博厚の「フランスには日本にない色がある」という言葉を借りて、「それぞれの国には日本にはない特色があり、風土、生活様式などが異なることからすべての国が印象的であった」と答えてきた。

当時、ベトナム旅行を扱う小さな旅行社が大阪にあったが、キューバ、イラクについてはどこを探しても「扱ったことがありません」の返事ばかりであった。窮余の一策として、直接東京の大使館に問い合わせしてみた。すると、入国の仕方や旅行案内などが書かれた丁寧な文書が送られてきた。それらを頼りに90、91年ベトナム、95年キューバ、97年イラクに旅した。これらの国々への旅行については、「なぜ、わざわざ人の行かない危険な国に行ったのか」とよく聞かれた。2週間近くアメリカでホームステイした時と10日ほどアメリカの知識人にホームステイしてもらった時などには、訝しがられ警戒さえされた。アメリカが敵として戦った国ばかりであるからなのだが、アメリカ人の世界認識が日本人である私と大きく異なることを教えられることにもなった。

私は社会科の教師という職業柄、深刻な問題を抱えていると報じられる世界の国々をできるだけ自分の目で見て、自分なりに理解したいという、大それた身の程知らずの思いを持ち続けてきた。ヨーロッパの国々とアメリカについては、明治以来の日本の西的近代化は、どこが同じで、どういふ風に違っているのか。計画経済が行き詰まり、

社会主義市場経済政策が行われていると伝えられるが、中国、ベトナム、キューバの人々の生活ぶりはどのようであろうか。10年にも及ぶイラン・イラク戦争を戦い、クウェート侵攻による湾岸戦争で壊滅的打撃を受けた、サダム・フセインの支配する古のメソポタミア文明の国イラクはどうなっているのであろうか、などなどである。

イスラムの問題については、一昨年のテロ事件のかなり以前から疑問、関心を持ち続けてきた。世界的な他の大宗教に比べて、イスラム教徒は経典「コーラン」に敬虔に帰依し、日常生活にねがず度合いが強い。信者は世界的に増え続け、キリスト教が形骸化しているといわれるアメリカでさえ増加していると統計数字は示している。これは何故なのか。この状況を理解するために、一つは自分の反省も兼ねて、欧米の高等学校や大学で使用されている世界史の補助教材や解説書を読んでみた。日本の高校で使用されている教科書よりもはるかに

詳細で、「コーランか剣か」といった単純な記述ではなく、イスラム教が伝統的に寛容であった歴史的事実も書かれている。もう一つは、イスラム社会の現実を直に自分の目で見てみたい。この両方を重ね合わせ、イスラムの国を歩くことにし、現在に至っているのである。

ウォーキング・ブーツを履き、リュックサックを背負って、見知らぬ町や、暑い日差しの下を歩いている時や、歩き疲れて道端の木陰にリュックを枕にして寝転んだ時などに、よく地理歴史部の研修旅行のきれぎれが脳に浮かんだ。ウォーキング・ブーツを初めて教えてくれた松本順二君、部員でもないのに箱根旧街道を一緒に歩いた大きな後ろ姿の岩田礼二君、三輪神社の境内に思い思いに腰を下ろした内山泰守君、加藤邦浩君、鈴木通代さんの姿などなどである。こんな時、私の外国旅行の原点の一つが浜松南高の地理歴史部の研修旅行にあると懐かしく思うのである。



後藤澄夫先生プロフィール
昭和46年4月より昭和56年3月までの10年間、社会科の教諭として浜松南高在職。「百聞は一見に如かず」がモットー。ソフトな語り口と、当時乗っていたライトブルーのフォルクスワーゲンは、先生のトレードマークでした。磐田市西貝塚在住。7回生(36HR)、10回生(33HR)、13回生(31HR)、14回生(31HR)、16回生(31HR)の担任を務められました。